



〈民主〉と〈愛国〉

「国民主義者」肯定的意味で使用

小熊 英二著

四百字詰め原稿用紙二千五百枚の大著であり、おまけに私の本への言及もあるので、二枚と少しで書評するのはむずかしい。ここでは叙述の枠組みについてだけ触れる。

著者は心情と言葉（言説）を区別する。言葉は心情を盛る器であるが、そういうものとしては大抵は不十分で、適切な言葉は見つからない。そのため新しい、また個人的な心情もしばしば古い、既存の言葉を鑄り直して表現される。それによってようやく伝達が可能になる。

著者によれば、戦後思想とは戦争体験の思想化だった。敗戦に臨んで、当面する状況の規定や今後の生きる目標は、やはり昨日までの戦争中

に流通した言葉を組み替えて示される。

戦中から戦後にかけて丸山真男や大塚久雄が試みたのは、「総力戦」を文字通りの下からの自発的なものに改めることだった。それが「民主主義」になることは、戦争を戦った相手方のアメリカのことを考えればよい。こうして丸山や大塚が掲げたのは「国家主義」ではない「国民主義」の思想だった。そこでは「民主」は「愛国」と深く結び付いていた。

カルチュラル・スタディーズが彼らを国民主義者と言うとき、それはネーションの存立を自明視する人という意味で否定的に使われる。著者はこれを肯定的な意味で用いる

最初の人である。そこには戦後史を思想的に定礎しようとする知的戦略があると思われるが、少し強引さも感じられる。確かに保守派と共産党は「愛国」や「民族」の象徴を好んだが、丸山たちリベラルにはそれはきわめて政治主義的に見えたはずである。

私への批判だが、都築は六〇年安保になって登場する「市民」や「市民社会」の語が敗戦直後からあったように論じていると言う。誤読である。それらは戦前からあり、マルクス主義の影響を受けながらそれに完全には組み込まない人々（大塚や丸山）の学問的立場と親和的だった。六〇年安保は確かに転機だが、その直前になって内田義

彦つによりこれらの言葉が再び想起されたことは興味深い。理由はやはりマルクス主義の後退にある。ちなみに我々は今、三度目に類似の状況の中にいる。

それにしても読みごたえのある本である。各論の中では竹内好や吉本隆明についての考察が、従来の見方をくつがえして、おもしろい。

（都築勉）

著者は慶応大学助教授。

